

◆冷酷で豪快な人物像はウソ？

歴史上の定説を覆すような新しい知見は、私たちがワクワクさせてくれるものです。聖徳太子は存在しなかった、とか、生類憐みの令は悪法ではなかった、などがそのいい例でしょう。最近では、冷酷といわれた織田信長は、実は正義感が強くセコイ人間だったという、従来の信長の人物像を打ち砕く新説が登場し、興味が尽きません。今回は、その信長を取り上げてみたいと思います。

他の武将と違って、健康体でありながら謀反で亡くなった信長に関しては、健康法というものがそぐわない印象がありました。しかしながら、あえて健康を意識してはいないものの、信長にまつわるエピソードを知るにつれ、彼の魅力やまっとうな精神力に満ち溢れ人々を魅了してきたことに気づかされます。つまり、極めて健康的であったといえるわけです。

◆村人にエンターテインメントを

私は、信長の最たる魅力は「遊びごころ」だと思います。現代の感覚では認めがたい行動や発言も、当時は驚くほど新鮮で夢を見せてくれるものだったのではない

でしょうか。

たとえば「踊り」です。

ある夏の日、信長は尾張の国(現・愛知県津島市)で、盆踊りを試みます。盆踊りといってもその詳細をみれば、いわば仮装大会です。まず、家来衆にあれこれ扮装させます。ある者は鬼に、ある者は地藏に、そしてある者には弁慶や鷲の恰好をさせ、みずからは天人に扮し女人踊りを踊るのです。何と奇抜で、楽しいものであったか、想像しただけで心が華やぎます。暑さも吹っ飛んだことでしょう。村々の年寄りたちが返礼の踊りを披露すると、信長は大層喜び、人々に親しく褒め言葉をかけたほか、茶を振る舞ったり団扇で仰いだりしたといわれます。

また、滋賀の常楽寺に滞在した際には、近江の相撲取りを呼び寄せて相撲大会を開催しました。我も我もと多くの相撲取りが集まり、大変な賑わいだったとか。勝った者には褒美を与えたほか、相撲奉行として召し抱えた者もありました。相撲奉行とは今でいう相撲担当大臣です。こんな茶目っ気のある振る舞いをするとは、なかなかに憎い信長です。

信長の残酷さを表す行為としてよく知られているものに、首を肴にした酒宴、があります。

北国で討ち取った朝倉義景、浅井久政、浅井長政の首を漆で塗り固めてから金箔で彩色し、それを目の前に並べて宴会を催した、というものです。確かに、現代の私たちからみれば目を背けたくなるような無礼な行動です。

◆乱世にもストレスをためない

でも、時代が時代なのです。裏切りや政略結婚はもちろんのこと、誰が味方で誰が敵かもわからない。敵の大将の首を捕った者は英雄として崇められ、戦が終われば死んだ者が身に付けていた物を余さず奪い取りました。関ヶ原の戦いで、大垣城に籠城していた女性による「おあむ物語」には、敵方武将の首の処理をした様子が描かれています。「首は怖くない」「血なまぐさい中で寝た」との記述もあり、改めて乱世であることを思い知らされます。

当時の茫洋とした時代背景に思いを寄せれば、一見残酷にみえる信長の行為の評価も違ったものになるのではないのでしょうか。

「うまくいくから嬉しいのではない。嬉しいからうまくいくのだ。さあ、笑いなさい」とはフランスの哲学者、アランの言葉です。信長は、皆があつと驚くような「遊びごころ」で、心身の平衡を維持し、下剋上の時代を生き抜いたひとりなのだと思います。



う え だ み つ え
植田美津恵

医学博士・医学ジャーナリスト。首都医校(東京)教授。愛知医科大学医学部客員研究員、日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事。著書に『江戸健康学』『戦国武将の健康術』など。近著『忍者ダイエット』も好評発売中。

